

多神教とは違う一神教の特徴は何か

～以下、書評「一神教 VS 多神教 (岸田秀 著)」 <藤森照信 評> (毎日新聞 02.9.22) より～

(・・・・・・は省略部分)

奈良や京都の寺にお参りした時、うす暗い祭壇の正面に、もし手足を釘で打たれ血をしたたらせる刑死直後の仏様 (というものがあつたとして) がダラリと掲げられていたら、どうしよう。・・・・・・。

キリスト教会はなんのためにあのような姿をわざわざ二千年近くさらしつづけているのか、どんな図像効果を期待してのことなのか、子を抱く慈悲観音のようなマリア像だけでは足りないのか・・・・・・。自分たちの神の“化身”をあんな目にあわせた連中への復讐の誓いのしるしかもしれないと思う反面、「右の頬を打たれたら、左の頬をも向けよ」という教えもある・・・・・・。

キリスト教に加え、母体となったユダヤ教、子として成立したイスラム教、この3つが千年以上に渡って繰り返した争いのひどさは世界史年表を見れば一目瞭然だし、現在のパレスチナ問題、「十字軍」を口にするアメリカ指導者の精神的、文化的背景を考えると、この3つの宗教には、私たちがなんとなく身につけてきたイイカゲンな宗教とは根本的にちがうビョーキが隠されているのではないか、と思わざるをえない。

ビョーキの原因は一神教にあり・・・・・・。

ヨーロッパでもアジアでも昔は、たくさんの神々を認める多神教だった。日本は今もそう。そうしたなかで、ユダヤ教を起源とする一神教グループが成立してくるわけだが、その特徴は多神教と比較してどこにあるのか。・・・・・・。

まず、人間との関係でいうと、多神教の神々は、民族と血のつながった先祖とか、周囲の目立つ木や石に宿る精霊とか。古代ギリシャのようにへまもする神々とか、要するに人間と社会と自然をよきものとして素直に反映する人くさい神様であるのに対し、一神教の神は、人間との血縁性を否定し、絶対的に超越し、最後に裁く。

言葉については、

「文字というものは、目の前の具体的世界とは別の抽象的世界をつくるには不可欠です。だから、血がつながった神を信じる民族には文字をもたない民族がいるかもしれませんが、文字がなければ、一神教は成立できるはずがないのです。“はじめに言葉 (ロゴス) あり” という『ヨハネの福音書』の冒頭の文句は、やはり文字がなければ、福音もない、いや世界もないと言っているのでしょう。モーゼの十戒そのものが文字でしょう。あの形態そのものが血縁幻想を否定していると考えられますね」

確かに『聖書』と『コーラン』の強さは、仏典や孔子の言葉の比ではない。

では、どうしてそのような言葉の抽象能力に頼るような不自然な超越的宗教は生まれ出たのか。よく知られているように、一神教の元になったユダヤ教は、古代エジプトで苦役に服していた奴隷たちが、モーゼに率いられて逃走し、紅海を割って渡り、パレスチナの地に逃げ込んで、のモーゼ十戒の許(もと)に確立しているが、その出エジプト記のなかに、一神教の秘密が隠されている・・・・・・。

「ユダヤ教は迫害されて逃亡した奴隷たちの宗教だったのです。もともと被差別者の宗教だった。だから、この宗教にはもともと恨みがこもっているのです」

「一神教では、唯一絶対神への無条件の帰依、絶対服従が強調されますが、奴隷社会において、絶対権力を持つ支配者と、

彼に何の不満も疑いも持たずに服従せざるを得なかった奴隷との関係のパターンがそのまま神と信者との関係に移行しているのです」

「追いつめられると、唯一絶対神という妄想を發明して、それにしがみつくとするか、一神教に逃げ込むとするか、そういうことをするのは弱い人間の一般的な傾向であって（略）近代天皇制は一種の一神教、擬似一神教ではなかったか……。近代日本は、一神教の欧米にさらされて（略）天皇を引っ張りだしてきて神聖不可侵の神のような存在にし（略）明治になってから戦争ばかりやっていました」

わが国の歴史をふり返っても、キリスト教と接した時、一度目はキリスト教好きの絶対権力者信長を、二度目は近代天皇制を生み出し、一大改革とともに発病もした。さいわい病死には到らなかったけれど。

.....。